

## 幕末期の朝廷について——何が言えるのか——

家 近 良 樹

はじめに

家近です。私こういう場で喋ることになろうとは、まったく思っておりませんでした。というのは、今日ここにお集まりの方々はいまだ現役で朝廷研究をやられているんですが、私は実はここ七年ほど、まったく朝廷の研究はやっておりません。それで田中さんには発表は無理だと申し上げたんですが、ひと昔前に蓄積したものでいいからということでお引き受けすることになりました。それで急遽レジュメを作成しました。

ただ、先ほどの長坂さんのように、丁寧でかつ新味のある発表は当然できません。今日は幕末史の立場から天皇や朝廷研究に関して、いま現在こういうことが最低限言えるんじゃないか、という話をアト・ランダムにちょっと申し上げたいと思います。

では、始めます。「幕末期の朝廷について何が言えるのか」とい

うことから話しします。もともと、皆さん御存じのことばかりだと思んですが、確認も含めて申し上げます。レジュメの一番最初のところに書きましたように、本来の望ましい発表というのは、やはり近世、近代を通じて見た場合に何が言えるのかということだろうと思います。近世史と近代史に研究上の断絶があるのは望ましいことではないですね。ただ、私の実力不足でどうしても今日は幕末期の話が中心になります。お許してください。

ところで、私のこのごろ特に当たり前だと思われていることを確認するのは、意外に大事じゃないかなという気がしております。というのは、「あれっ」と思わされることが結構多いんです。「この点までは皆さん全員が認めていいじゃないか」という、そういうものをやはりきちんと確定して、次の段階に研究を進めるということをやらないと、また原点みたいなところに戻って、つまら

ない時間が流れる、時間を空費することが少なくないという気がします。したがって、非常に当たり前のことを確認することからまずは始めます。

例えば、その一つが尊王攘夷です。幕末史では天皇や朝廷を尊ぶということで、しばしば尊王という言葉が出ます。これに連動して尊王派という言い方がごく普通に使われます。ところが、幕末期にあつて、自分の発言に責任をもつ立場にある人間で尊王であることを否定する者はまずいません。もちろん、一般の幕臣などの中には、心の中でそれを強く否定する者もいたかもしれませんが、それとて公にはとてもじゃないが、表明することは出来ません。

だから、そういうことを考慮すると、尊王や、あるいは尊王派といった言葉を使うことには、実は意味がないんじゃないかなと私などは思っております。言い方を換えれば、こういう言葉を使わないで幕末史を説明した方が、むしろ史実を正確に説明できるのではと考えています。

#### 一 幕末維新史最大の研究課題

次に移りますが、幕末維新史最大の研究課題というのは、やはり徳川政権に代わってなぜ近代天皇制が誕生したのかということでしょう。そして、これに続いて問題とすべきは天皇制支配イデオロギーがどのようにして民衆の間に浸透していったかでしょう。

こうしたことが幕末維新史最大の研究課題だと思います。

ところが、研究が細分化し精緻なものとなったこと自体は良いのですが、逆に近年の研究では、こうした研究の原点となるべきものが忘れ去られているのではないのでしょうか。あえて申し上げると、非常に瑣末な問題だけが、下手をすると取り上げられるようになっていとも感じます。少なくとも、そういう嫌いが無いわけじゃないと思います。だから、読んでいて面白くないことが多い。胸がわくわくするような、そのような論考に接することが少なくなっているような気がいたします。

さて、そうした中、先ほどの幕末維新史最大の研究課題に関する共通理解としては次の二点が認知されるべきでしょう。①幕末期に天皇の地位・権威が急上昇した。この急上昇したというところがポイントです。そして、この延長線上に近代天皇制の成立がある。②天皇制支配イデオロギーは、明治二十三年（一八九〇）の教育勅語の発布と大日本帝国憲法の施行以来、組織的に各地域に浸透する。逆に言えば、それまでは十分に天皇制イデオロギーが、民衆の間に浸透し得なかった。そして、ここに時の維新政府や明治政府首脳が当然あったわけではあります。

以上の二点がやはり共通理解として認知されるべきではないかと思えます。とにかく、ものすごく当たり前のことを今申し上げます。

## 二 幕末史において否定しえないこと

つづいてレジユメの二に入ります。幕末史において否定しえないこと。やはりなんといいても安政五年（一八五八）が朝廷と幕府両者の関係において重要です。すなわち、この年、日米修好通商条約の勅許を求めて老中の堀田正睦が京都にやってくる。そして当初は割と簡単に孝明天皇の承認を得られると思っていたのが、そうはいかなくなつて、幕末史が幕府が考えていたのとは違う方向に行くことになる。そういう年ですね。

私は、昔書いた本（『幕末の朝廷』（中公叢書）他）で強調したんですが、孝明天皇は、この時、幕府の勅許奏請を拒絶したのではない。多くの本や論文では攘夷の立場から幕府の勅許奏請を拒絶したと書かれているんですが、厳密に言えばそうではありません。孝明天皇は幕府が求めてきた条約勅許奏請に対して、この時、ただちに承認はせず、もう一度諸大名の意見を聴取して欲しいと幕府に要望したのです。承認しないことと拒絶したことは全然違います。

孝明天皇は、この段階では決断を下せなかったのです。つまり、幕府の要求を拒絶するほど明確な意思は表明しえなかったということです。それは、幕府側の状況説明（世界史の流れについてのものです）を受けて、開国の要求を拒絶すれば、欧米諸国と戦争になるかもしれないことは十分に理解しえたものの、その一方で大きな不安が生じたからです。国のあり方を鎖国から開国に大き

く変えることが、この国に住む民にとって、はたして幸せなことかどうか、この点に関してどうしても結論が下せなかった。また祖先にあたる歴代天皇に対して申し開きが立つか確信がもてなかった。そうしたことが、幕府への再度の要望となった。こう考えるべきだと思います。

いずれにせよ、このまま自分が最終的に承認することによって、なし崩し的に日本がいわゆる開国体制に移行することによって、も納得できなかった。それが孝明天皇をして承認できないという、そういう状況に追いやったというふうに私は考えています。

ついで、そうした思いが、井伊政権による条約調印によって無視されると、それを痛烈に批判する勅書を水戸藩にひそかに授けるといふ行為につながります（安政五年が、いわゆる戊午の年にあたつたため、「戊午の密勅」と呼ばれます）。ところで、幕末期の史料を眺めていると、「戊午以来」という言葉が実によく出てきます。それだけ、この安政五年という年が重要な年であつたということですね。これは否定しえないことです。

それから①で取り上げましたが、この年をきっかけとして、従来、あえて曖昧にされてきた（このあえてというところが、江戸期の朝廷と幕府の関係を考えるうえで非常に大事です）幕府と朝廷との関係が公然と論じられるようになる。この公然というのがポイントになります。両者の関係が公然と論じられるようになってくるのが、やはり、この安政五年以降じゃないか考えます。つ

づいて、天皇の政治的地位が格段に上がり、それに連れて朝廷の政治化が顕著になってくる。

そして、このことと大いに関係するのが③です。すなわち、日本国の真の主権者は將軍（幕府）か天皇（朝廷）かという問題の登場です。ところで、ここでまず確認しておかねばならないのは、幕末期において國王たりうるものは天皇か將軍しかいなかったという事です。幕末最終段階になると、一応形のうえでは徳川家の当主以外に、例えば長州藩主とか薩摩藩主も將軍の候補者になり得るといふ状況が出てきます。そういう状況は出てくるんですが、実際問題として、多くの支持を獲得できるかどうか（つまり多数派が支持してくれるかどうか）の問題を考えれば、やっぱり天皇か將軍しか國王の候補者たりえなかつたと言えるかと思えます。こうしたことを無視して論は進められません。ついで、やはりこの問題と連結することですが、④で取り上げたように、京都が江戸に代わって政局の主要な舞台となります。

それから⑤。これが一番重要なことです。慶応三年十二月に行なわれた王政復古クーデター。幕末史における非常に有名な出来事ですが、これによって旧来の伝統的な朝廷、旧態依然とした朝廷が否定されました。王政復古クーデターで非常に大きなウエイトを占めるのは、もちろん旧来の伝統的な朝廷のあり方、これが否定されたことです。要するに摂関制の廃止ですね。それから、これに付随する内覧制など、古代・中世時から続いてきた朝廷の

制度が全面的に否定されたんです。近代天皇制の成立は、この伝統的な朝廷の否定の上になされました。

実は私、つい最近自分の考え方を改めないといけないと思うことがありました。私は、いままで王政復古クーデターを執行した最大の目的は、朝廷を中核とする新体制の成立に難色を示した会津・桑名両藩（なかでも会津藩）を大久保利通や西郷隆盛らがクーデターを執行することで挑発し、そのあと叩き潰すことにありと強調してきたのですが、これを少し改めないといけないと思わされることがありました。王政復古クーデターで摂関制や内覧制が廃止された側面をいままで軽視し過ぎたというのが最近の反省です。

例えば、薩摩藩関係者などが特に該当しますが、幕末最終段階になると、朝政を担当する人物の力量がないことを直視して、旧来の伝統的な朝廷、旧態依然とした朝廷の改革をしないと、彼らは朝政ひいては国政を運営しえないとの、非常に深刻な問題に直面するわけです。そうした面を私は今まで軽視し過ぎたという自己反省をいま自分の中で突き付けられているんです。

このことを思い知らされたのは、最近、摂政・関白以下、朝廷上層部の動向を具体的に記した史料を読み直す機会があったからです。この一ヶ月ちよつとの間、関連史料を精読した中で、改めて思ったのは、摂政とか関白、それに左大臣以下の朝廷上層部を構成する公家がことごとく改革に反対するんです。とにかく、今

までのあり方を変えることに、ものすごく抵抗するんです。

そうした中、徳川慶喜が大政を奉還して、朝廷上層部が朝政のみならず国政も担当しなければならぬ可能性が突如浮上してくる。ところが、彼らは、もちろん自分たちが国政を担当した経験がない。そこでわずらわしく思うわけです。これは後でまたそういう話をします。要するに、難儀するのが目に見えているので嫌だ、現状のままでもいいという、こういう公家が朝廷上層部にいる。クーデターで、彼らを至急排除しなければならなかったわけですから、次に、⑥では、ごく当たり前のことを挙げました。孝明天皇の影響力（存在）が極めて大きかったと。今日は残念ながら孝明天皇のことは、詳しく申し上げられませんが、この孝明天皇の影響力・存在が幕末期にあって非常に大きかったことは間違いありません。

なお、ここで真につまらないことを一寸言いますと、私がこの一ヶ月ほどの間に読んでいた史料の中で面白かったのは、この孝明天皇というのは中山家を非常に嫌っているんですね。そういう史料に出会って、「へえ」と思いました。そして、こういう史料を読むと色々な想像が膨らんで楽しいですね。例えば、正親町少将という人物がいるのですが、孝明天皇が島津久光に宛てた宸翰中に、正親町少将は、中山家の出身であるから人柄が悪いといったことを書いています。したがって、こういう箇所から孝明天皇が中山家に良い印象を持っていなかったことが判る。

ところが、皆さん御存じのように、中山忠能の娘（慶子）との間に祐宮（のちの明治天皇）が誕生する。ついで孝明天皇が痘瘡で亡くなった後に踐祚したこの少年天皇が祖父の中山忠能の影響を受けて、「討幕の密勅」を出すことになる。だから、「孝明天皇がもし慶応二年の末に亡くならなかったら、随分違った歴史過程を歩むことになったんだろうな」とか、そういったことを想像したりして、ほんの少しの間ですが、楽しい時間を持つてました。

それからレジュメを作成した後の段階で考えたのは、最後の將軍であった徳川慶喜、それから島津久光、こういった人物がどういう共通認識を持っていたかと言えば、天皇が間違いを犯さない完璧な存在であるなんて、まったく思っていないかったということです。そして、他ならぬ孝明天皇自身も、自分が到底完全な人間ではないことを認めているんです。このことがよく判るのが、島津久光に宛てた天皇の宸翰です。ここには自分が愚昧である、愚か者であるといったことが、率直に記されています。こういう宸翰などを見せられると、もちろんこれは写しですが、やはり天皇が間違いを犯さない完璧な神のような存在であるとは、最初から受け取れないでしょうね。

こうしたことを前提に薩摩藩のその後の動向を押さなければならぬといったことを、改めて確認しました。自分では、そんなことはわかっていたつもりなんです、改めて痛感しました。そして、この天皇の存在は完璧じゃないということを前提として、

朝命、勅命がそれ自体で正当性を持つんじゃない、誰をも納得させるだけの条理・正当性を持って初めて朝命、勅命となりうるんだとの考え方が、幕末期に、とくに薩摩藩の大久保利通あたりから出されてくるのです。

### 三 天皇・朝廷研究の経緯

つづいて、私には不得手な分野ですが、これまでの天皇・朝廷研究の経緯について申し上げます。もともと、諸先生方の書物をほんのちよっと読んだぐらいですので、間違ったことを申し上げます。後でお教えいただけたら幸いです。

この点に関する長年にわたる論争の原点は、やはりここに書きましたように、天皇・朝廷権威の上昇は、幕末期に突然生じたのか、それとも江戸期にそもそも発生源があったのかという、この問題をめぐるものでしょう。そして、この問題は戦後すぐに大きな問題になったと思いますが、いまでも一度大きな問題として取り上げねばならないと考えます。ところが段々、こうした問題から研究者の関心が離れていって、先ほど言いましたように、瑣末としか私には思えないような論争が展開されているような気がしてなりません。

#### ① 朝幕関係にとって画期となったとされる時期（諸説）

それから、レジュメ①の近世史研究ですが、私は教科書レベルのことしか理解しておりません。それは、②に書きましたように、

天皇・公家の中に反幕的志向が見られたとして、従来から重視されてきた人物や事件を主に取り上げるものです。すなわち、勤王に関わる事件をたどりながら、幕末の天皇・朝廷権威の急上昇に結びつけようとする、いわゆる政局史・事件史の立場に立つ研究です。

その最たるものとして、後水尾天皇の紫衣事件をめぐる幕府との対立や宝暦事件、明和事件が俎上に載せられてきました。これはもうどなたも御存じなので、あえて申し上げます。そして、こうした立場にたつ研究は、いうまでもなく、そもそも江戸期に天皇権威、朝廷権威の急上昇の要因があると見るものです。ついで、このことを前提に近世史研究においては朝幕関係にとって画期（ターニング・ポイント）となったのは何時の時点かという問題が討論の対象になっていくかと考えます。もちろん、これには諸説があつて、いろんな方がいろんな説を展開されていますが、以下、私の眼に飛びこんできた諸説中の主要なものを、ごく簡単に説明します（もつとも、これは、皆さん御承知のことですが、あくまで確認のためです）。

まず元和期ですね。ここに挙げたように禁中並公家諸法度の発令などを重視する研究です。それから、寛永期、これは私の理解する範囲でいえば江戸幕府の天皇・朝廷統制の基本的な枠組みが確定したことを重視するものかと思えます。その中でも寛永十二年（一六三五）の武家諸法度の全面的な改定などが特に重視され

ているかと考えます。

ついで、寛文期ですね。これは近習衆の設置など朝廷内に新たな課題が生じたことに対応して、こうしたものが置かれたことを重視した研究かと思えます。

それから寛政期。これは私などのような幕末史専攻の者にとつては、近い時期ということで、とりわけ大きな影響力を持つていると感じております。時期が近い分、幕末期における天皇・朝廷権威の急上昇の問題にも直結するからです。なかでも、十数年ぐらい前から光格天皇の存在、これを重要視しようじゃないかという、そういうご意見が出てきて、これは今では有力な見解じゃないかと私は受けとめております。

この光格天皇という天皇の存在を幕末期の天皇権威急上昇の源泉と見るという見解ですね。非常に面白い説だし、私も教えられることが多々ありました。それから同時期の人間であった老中の松平定信が唱えたとされる大政委任論ですね。この定信による大政委任論の歴史的な意義というものを大きく見ていこうじゃないかというような、こうした考えが寛政期をターニングポイントとして取り上げようという説となった。

それから、次の文政・天保期説というのは、これはこの時期に、どなたも御存じのように、国内において封建的危機が非常に深刻になる。打ち壊しとか農民騒擾が各地で発生する。むろん、大塩の乱とか、生田万の乱が起こる。だから、いわゆる本格的な体制

危機の時代として、この時期を画期として見ようということになった。

#### ①近年の研究の特色（一九七〇年代～二〇一四年）

そういう中で、朝廷と幕府に関する近年の研究の特色というところで、一九七〇年代ぐらいから今日までの間の研究の中で、いの一歩に挙げねばならないのは、公儀権力論の登場でしょう。これは皆さんも御存じのように、天皇・朝廷を公儀の一環とすることで、幕藩制国家が成立した、天皇・朝廷の権威が幕藩体制の不可欠の構成要素であったと見る説です。要するに、それまでの天皇・朝廷は幕府に押さえつけられていたという、そういった考え方は違う見解が登場した。そして、これも学界の共通認識ともはやなっていると思います。私自身もこの見解は否定しえないと考えております。

それから、②に挙げたように、朝廷・公家社会の基本構造の解明が徐々に進んでいったのがこの時期の研究上の特色じゃないかなと思います。朝廷組織・制度を含む朝廷の総合的な研究がやられ出したということです。具体的に言えば、親王・摂家・公卿・平公家・地下官人などの宮中生活の実態。それに、朝廷の儀式・儀礼・祭祀・家格・官位制度・法制度といったものの分析が行なわれるようになりました。

実はここでちょっと個人的なことを申し上げますと、私、二〇〇二年から二〇〇三年にかけて中央大学の方にお世話になりました、

一年間この東京で生活しました。その時に『大日本維新史料稿本』という史料(マイクロ・フィルム版)を一年間ずっと読みました。午前と午後、夜はさすがに出来なかったのですが、関係諸機関の協力を得て読ませていただいたんです。

その時に、発見したことがあります。実は私、それまで、つまみ食いばかりやってたんですね。史料を摘み食いしては書いてたんです。それがとつても嫌になりましたね。そこで第一リールから読み始めよう、それも端から端まで読んでやろうと思いたちました。ついで、あの大部の『大日本維新史料稿本』を最初の一行から読み出し始めました。そして、何を感じたか。無茶苦茶面白くないんです。朝廷に限れば、出てくるのは宮中の行事ばかりなんです。それも延々と続くんです。それをひたすら我慢してじつと見ていったんです。その結果、鬱が再発しました。

それはともかく、そうした作業から私が学んだことは何か。歴史学というのは、御存じのように、どの段階でどのような変化が生じるかということ、ずっと探る学問ですよ。つまり変化していく面に常に着目する、私は、そのようなやり方が、本当にいいのかなということを考えさせられたんです。

朝廷関係の史料を見ていくと、むしろ変わらない側面の方が圧倒的です。旧例・旧慣を後生大事に守っていかうとする姿勢がとにかく凄い。そこにあるのは、現代社会を生きている我々のように、改革や変化に価値を見い出すとは真逆のあり方です。そこ

で私は変化する側面を辿っていくという、これまでの自分の研究のあり方ははたして正しいのかなといったことを、ものすごく考えさせられました。そういう思い出があります。

では、次は◎ですね。近年の研究の特色の二番目ですが、私はこの数十年の間に江戸後期から前期に研究対象が広がっていったなど感じております。

### ㊦幕末史研究の経緯

#### ㊦第二次世界大戦後から一九六〇年代

つづいて、いよいよ幕末史の項に入ります。そして、ここでも真に申し訳ないんですが、わかりきったことを、ほんの少し申し上げることになります。まず第二次世界大戦後から一九六〇年代にかけての大きな特色についてです。

第二次世界大戦前は、御存じのように、まともな研究というのが、なかなか出来なかつたものですから、敗戦後にやはり研究が本格化するわけです。その中で、懐かしいなと思われる方がおられるかもしれませんが、いわゆる「講座派」に属した研究者によって唱えられた天皇制「絶対主義」説が全盛期を迎えます。すなわち、維新の結果、天皇制「絶対主義」国家ができたと思える見解、これが圧倒的だったわけです。要するに、封建制の最終段階に登場するレベルの国家が誕生したと見る説です。そして、このことを前提に、絶対主義へ至る途を探し出そうという研究が盛んに行なわれた。年配の方は御存じだと思いますが、少なくともそうし



た研究が主流だったわけです。

そして、こうした中で、幕末期においては長州藩における改革勢力が過度に重視されることとなります。つまり、長州藩内における藩政改革派から尊王攘夷派、ついでそれを否定する形で武力倒幕派がでてきて、最終的には維新官僚につながるという、そういう政治勢力ですね。これには山口県立文書館蔵の膨大な史料群の存在が前提としてあるわけです。五万点でしたかね。私も一度だけ書庫に入らせてもらったんですが、入った途端に思ったのは、もう長州の研究はやめようと言うことです。その位、圧倒的な分量があります。

しかし、個人的な思いは別として、やはり研究というのは史料があるところがやられるというのは、当たり前のことですので、長州藩の研究がもっぱらなされてきたわけです。では、薩摩藩はなぜやらなかったと言え、史料がないんです。それに尽きるんです。会津藩はもつとないです。私は会津の研究をやりましたけれども、その時、地元の市立図書館にある、活字になっていない史料は全部見ました。何年間かかけて。それぐらい史料の量が少ないのが現状です。

それから、これももはや共通認識になっているなど感じるのは、レジュメの③ですね。近世の幕藩体制から幕末期の公武合体体制へ移行するとする説です。これが、いわゆる朝幕二重政権論ということにつながるわけですが、こうした見解は、いまや市民権を

得ているんじゃないでしょうか。

#### ④ 一九七〇年代～一九八〇年代

それから、次の一九七〇年代～一九八〇年代にかけての研究状況ですが、これはなんといっても実証的な政治史研究が非常に進展したことに尽きます。その結果、日本の近代国家を絶対主義云々といったレベルで議論することが、もはや意味をなさなくなってくるんです。つまり、具体的な史実を知られば知るほど、明治以後の日本政治を絶対主義への傾斜云々といった観念的なレベルでは捉えきれなくなりました。史実を理論がまったく説明できないわけです。こうしたことがはつきりとしてくるのが、一九七〇年代から一九八〇年代じゃなかったかと思えます。

そのように、実証研究が進む中、長い間ずっとやられてきた公武合体と尊王攘夷を対立軸として設定する幕末政治史の基本的な図式への批判などが出てきます。また国事御用掛の設置など近世以来の朝廷政務機構からの逸脱行為が見られたこと、こうしたことに代表される朝廷の政治化の実態などが具体的に明らかになってきたのが、一九七〇年代から一九八〇年代じゃないかと思えます。

なお、この点に関連したことを申し上げますと、この一ヶ月ほどの間、史料をずっと読む生活をしていて、改めて思わされたのは国事御用掛というのは、とてつもない権力を掌握したということですね。特に文久政変前なんかが該当するんですが、この連

中は関白や左大臣などを押さえつけ、自分たちのやりたい放題のことをしだす。そのエネルギーたるやもの凄いですね。明らかに朝廷内に大きな地殻変動のようなものが生じたと思われました。だからこそ、文久政変（八月十八日の政変）が引き起こされることになったんです。そうした国事御用掛の問題なんか分析され始めたのが、このころのことです。

#### ㊦ 一九九〇年代以降

それから次。先を急ぎますが、一九九〇年代以降の幕末史研究においては、やはり何と言っても一九八九年十一月にベルリンの壁が崩壊したことが大きな影響を及ぼしたのは認めねばなりません。社会主義国が御存じのように解体して、グラッド・セオリーもそれとともに崩れた。それによって、マルクス主義歴史学の下に安住できなくなるという、これは歴史学だけじゃなくて、人文科学、社会科学すべての学問にまたがることじゃないかと思いませんけれども、大きな出来事が起こりました。

そうした中で、これも御存じのように実証研究が一層進展します。それと、いま一つ言えるのは、発想が多様化していきます。その中で朝幕研究にとって大きな意味をもったのは、幕府と朝廷の対立を重視する図式からの脱却がなされたことじゃないかと思えます。

その象徴が、いわゆる一・会・桑勢力の研究です。禁裏御守衛総督の一橋慶喜、京都守護職の会津藩主松平容保、京都所司代の

桑名藩主松平定敬の三者によって構成される勢力です。一會桑という言葉は昔からあったんですが、一會桑勢力という形で独自の勢力として分析されるようになるのは、一九九〇年代に入ってからのことです。

ついでに申し上げますと、一會桑勢力とは言っても、慶喜と容保と定敬は個人的な力量が一緒ではないです。私を見るところでは、やっぱり個人的な力量が突出してあるのは慶喜であって、容保・定敬の両者は力量不足の感がいなめません（もともと、定敬の場合は、あまりにも若かったということがあります）。したがって、会津藩と桑名藩の場合は藩士ですね。藩士集団が事実上藩を指導している面が強い。

だから、一會桑勢力とは、慶喜と会津・桑名の両藩士（なかでも会津藩の場合は、公用方を中心とする藩士集団）の結合というふうにも考えてもらってもいいような気がしますね。もちろん、容保、定敬の果たした役割はそれなりにあるんですが！。とにかく、そういう一會桑勢力が、幕末期的状況と私は言っているんですけど。幕末期特有の状況の中から出てくる。

つまり、幕府による朝廷独占体制が崩壊する。維持できなくなる。そうした中で、京都所司代の機能が不全状態に陥る。京都所司代が機能を果たせなくなる。そこで、京都守護職が設置されます。新設ポストとして。しかし、京都守護職と言っても限界があります。ここに会・桑両藩と、個人的な能力は図抜けているが、

固有の人材(家臣団)と軍事力に乏しい慶喜が結びつくことになる。そして彼らは、天皇とか関白以下の朝廷上層部との結びつきを強めていくことになる。これが私の言う朝幕関係に係わる幕末期的状況ということになるわけですね。

さて、こうした新たな状況が生まれる中、孝明天皇が時の天皇として、非常に大きな存在感を示すわけです。そして、この天皇が、幕府本体ではなく慶喜と容保を特に信任する。その結果、慶応期に朝幕間の一部勢力による朝政の独(寡)占、薩摩をはじめとする有力諸藩の国政の場からの排除という事態が生じるというふうに私は見るわけです。

ここで、原点にいま一度戻りますが、一会桑勢力の何が一番重要かと言えば、彼らの存在は従来、単に幕府側の勢力を代表する这么简单に見なされていたのですが、そうじゃないということです。彼らは、京都にやって来て、京都にいてことでしか考えられない事態に直面するわけです。そうした中で、天皇や関白その他、多くの人物から出される諸々の要求を飲まないといけない。反対に、時と場合によっては押さえつけないといけないといったことが起こってくる。なかでも、特に求められたのが、天皇(朝廷)を尊重する姿勢を示すことです。

ところが、これが要するに、天皇(朝廷)に迎合し過ぎだという、そうした批判を主として江戸の幕府首脳辺から受けるわけです(その他幕臣などからも)。ついで、御存じの方も多いと思いま

すが、一会桑三者の中でも、とりわけ慶喜と幕府本体との関係の悪化ということが起こってくる。そして、これが幕末期の中央政局において非常に大きな問題となる。こうしたことが、まず詳細に分析されるようになった後、近年の研究においては、孝明天皇や公家らのより具体的な動きが、また幕府本体や水戸・薩摩・長州・越前・会津・土佐・因幡・備前等の有力諸藩の動向が、段々明らかになってきておられます。こうしたことを受けて、幕末政治史はものすごく大きく変わってきたというふうに、私などは実感を持って考えているわけです。

孝明天皇に対する新たな評価が出てくるのも、こうした流れの中においてです。まず登場したのが、孝明天皇は、開国論ならびに鷹司家の朝廷支配と闘った、そういう天皇なんだという評価です。これはどういう評価かと言えば、祖父の光格天皇の強烈な君主意識をDNAとして受け継ぐ豪胆な性格の君主であったというものです。とにかく、このような新しい孝明天皇像が有力な研究者から提起されたわけですね。もともと、私はこの点に関しては、後でちよっと申し上げますが、異論を持っています。

次に、脈略のない話となつて真に申し訳ありませんが、幕末期の朝廷と幕府との関係を見るうえで画期となつたとされる時期について、少しお話しします。もちろん、ここに挙げた以外にも諸説あるのですが、一々そうしたものを取り上げてても限がありませんので、その内のほんの少々を紹介することにします。

やはり最初に挙げねばならないのは安政五年ですね。ついで挙げねばならないのは万延元年。これは大老井伊直弼の暗殺があった年ですね。それから、文久二・三年（一八六二年・一八六三年）という年。これは長州藩の長井雅楽、いわゆる航海遠略策と言われるユニークな開国説でもって彼が朝幕間の合体に向けての周旋活動に乗り出す時期です。また、島津久光という、これも非常にユニークな人物ですが、この久光が卒兵上洛して、そのあと江戸に下り慶喜と松平慶永の登用をはたす。つまり、幕閣最高人事の改造を、藩主でもない無位無官の者が成し遂げるという、前代未聞のことがなされます。こうした中で、幕府権威のさらなる低下、それと反比例するかたちで、天皇・朝廷権威のさらなる向上といったことが見られたということで非常に重要な年となるわけです。

以上、ざっと挙げたように、画期となったとされる時期の分析（研究）が細部にわたって、され出したと言えるかと思えます。特に若い人たちの個別研究が盛んに行なわれ出したということが言えるかと思えます。

ここで余談がてら申し上げますと、ほんの二十年ほど前ぐらいから幕末史研究というのは盛んになってくるんです。それまでは幕末史研究というのは全然盛んじゃなかったんです。それまでは維新史関係の研究が圧倒的に多かったです。だが、ここ二十年ほどの間、すっかり様変わりして、若い人を含めて幕末史研究（なかでも政治史）が大変盛んになってきました。

それから、これは新しい研究動向ということで、ここ十年ぐらい目立つんですが、政治を行なう場所（政治空間）などに注目した研究が多くなってきましたね。これは要するに、禁裏御所内の建物なんか注目して、当時の閑白とか、それに御所にやってくる諸大名たちが、どういうところを通って、どういうところでどのような話をしたかみたいな、そういう政治空間に着目した研究です。若い人たちは、こうした問題に飛び付く人が結構いるなどというのが私の感想です。

それから、④に挙げましたが、近世史・幕末史の双方にまたがる研究があります。これはもちろん今までもなされなかったわけじゃないのですが、こういった方面の研究もやられていて、ここに書きましたように、例えば、民衆の天皇信仰等についての研究なんかも多少はやられてきたんじゃないかなというふうに理解しています。これは、民俗学の成果などを受け継いだ研究が主流でしょうね。民衆の中に見られた生き神・現人神信仰などの研究ですね。それから、これは後に改めて、ほんの少し私も問題提起をしてみたいと思うことがあります。地域における伝統的な支配者であった上層農民や商人らと国学との関係です。幕末期に関しては特に平田国学との関係についての研究が非常に盛んになります。

それから、場所は限られるのですが、京都および近郊の民衆の動向などの研究も深められました。京坂地域に住む民衆の御所干度参りなんかの研究などがそれに該当します。

#### 四 個人的な雑感

つづいて、文字通り本日最後の話になりますが、私の個人的な雑感ということで、本当に冴えない話をほんの少しだけ申し上げます。

まず、孝明天皇に関してですが、私はこれは断言してもいいと思うのですが、この天皇は、いわゆる政治君主になる意思は全然なかったと言えます。王政復古などはまったく望んでいません。これは孝明天皇に関する様々な史料を私読んでいる中で、断言します。したがって、先程一寸ふれた孝明天皇と光格天皇とを直結させるという考えは、非常に難があるというのが、私の率直な感想です。

それから、次に①ですね。孝明天皇が幕府の勅許奏請に対して、なぜ勅許を与えなかったのか。つまり、なぜ承認しなかったのかという問題は、やはりきちんと検討すべき問題だと私は考えております。幕末史の原点であるこの問題を無視もしくは軽視して論を展開しても、私は意味がないと思ってます。

先ほども申しましたように、孝明天皇は幕府の条約勅許奏請を明確に拒否したわけじゃないです。どうしても承認できなかったのです。今一度、幕府より徳川御三家以下の諸大名への諮問を求めた。つまり、こういうタイプの天皇なんですね。

だから、自分の意思を押し付けるといえることはないです。信じるところを断固貫くといった専断者ではなく、多くの意見を聞いて

て慎重に決断を下そうとするタイプの人物であったということが、基本的には言えるかと思えます。それと、あれこれとどちらかかといえは思い悩むタイプの人物だったように私には見えますね。場合によっては、取り越し苦労というんですか、そういう取り越し苦労気味のところが多分にある人物だなと思いますね。それ故、豪胆な天皇といったイメージは、私の頭の中では浮かび上がってこないです。それからこれも先ほど申しましたが、終始一貫王政復古は望まなかった。幕府への政権委任論者です。この大政委任論者であるということは、終生変わらなかった。

さらに申し添えると、この天皇は、無謀な攘夷（無理な戦争）は好まない。私、この一ヶ月ほどの間に、史料を讀んでいて改めて思ったのは、兵庫開港勅許に関わることです。慶応元年（一八六五）の十月に、大坂湾に欧米四ヶ国の公使がやってきて条約勅許を求めた際、徳川慶喜が追い詰められて、朝廷上層部に兵庫開港の勅許を強引に迫る事件が起こります。

この直前、大坂にいた老中の中に、欧米諸国の要求に対し拒否するのは無理だと判断して、幕府の独断でもってそれを許そうとする動きが出てくる。ついで時の將軍であった徳川家茂が將軍職を辞退して慶喜に譲りたいと言って、大騒動になるといふ有名な出来事が起こります。そこで、追い詰められた慶喜が強引に条約勅許を朝廷に求めて、天皇および朝廷上層部から勅許を勝ち取ることになったわけです。

この時の史料を改めてじっくりと眺めると、この問題をめぐって時の関白であった二条斉敬や山階宮・中川宮らと慶喜との間で大きな論争が生じたことが判ります。もう条約勅許はやむをえない。いや駄目だということで、結局どうなったかと言えば最終的には天皇の聖断が求められた。この時、天皇は勅許するんです。

つまり、孝明天皇の判断でどちらに転んでもおかしくはない状況となった。そして孝明天皇は兵庫の開港を認めた。これは非常に大きなことを意味しました。要するに、この時点の孝明天皇は何が何でも攘夷という考えではなく、もはや攘夷ができないということがどうやら解っていたからこそ、勅許となったということです。そして、関連史料を見ると、この問題で事態が紛糾する前に、孝明天皇自身、そうしたことは、どうも理解しえていたようですね。だから、それだけの能力は持っていた。こういうことはやはり押さえておかねばいけないということを思いました。それと自分はこの国の君主であるという、孝明天皇なりの強い責任感が、その背後にあったんだろうなと思います。

それから、これもぜひ押さえておかねばならないのは、条約調印の責任のみを負わされることへの強い抵抗感でしょう。また、大名の中の少なからざる数の異論（通商条約反対論）も、かなりの程度、影響を及ぼしたと考えられます。こういった諸々のことが天皇をして承諾させなかったと想像されます。

次に㊦に挙げたんですが、これは意外と皆さん取り上げてくれ

ないので、嘉永七年（一八五四）四月の内裏炎上問題も孝明天皇の君主意識の形成問題を考察するうえで重要かと思えます。この年、内裏が炎上した際、天皇は御所の外に出ます。そして、この時、初めて民衆の生活を目の当たりにするんですね。取りあえず御所を出て下鴨神社に避難し、ついでそこで態勢を整えて、そのあと鴨川べりを下って聖護院に入るわけです。そして、翌年、御所が完成した時に、孝明天皇は自ら希望して遷幸時にわざわざ御所の西側に住む住民の生活を見ることになりました。

要するに、前年、御所の東側に住む民衆の生活を凶らずも見たので、今度は西側住民のそれを見たいと希望して、それが実現した。そして、このような経験が、私は孝明天皇の君主意識（もともと天皇には、こうした君主意識は当然のことながらあったのでしようがし）を刺激したと考えています。つまり、ここに住む民衆の生活を守る責任が自分にあるのだという念い、それがより鞏固なものになったと考えられます。そしてこうした君主意識が、安政五年の時点で幕府の求めた開国通商を承認しなかったことにつながったと考えるべきだと思います。

次、㊧に移ります。京都が幕末時にもった意味とは何かということですが、この点に関して一つだけ申し上げます。安政元年に当時越前（福井）藩主であった松平慶永が時の老中首座であった阿部正弘に提出した嘆願書があるんです。これは『福井市史』の資料編に入っているのですが、そこに次のような理由とともに、越

前藩による京都防衛が志願されています。そこには、「たとえ江戸が外国人の手に落ちてても」、京都が守られてさえいれば、「本邦惣崩れにハ相成間敷」とあります。これはペリー来航後、対外防衛問題が大きな政治課題となる中、京都にほど近い場所に位置する越前藩が、京都をしっかりと警固できれば、日本は最低限安泰だとの考えのもと、京都の守衛を志願したということです。

つまり、たとえ江戸が外国人の手に落ちてても、京都が外国人に奪われない限り、日本の国は総崩れにならないんだという、こうした認識というのは、恐らくその当時の支配者（少なくとも日本国の防衛問題を自覚をもつて考えていこうとした先覚的な封建支配者）の間にはあったでしょう。そして、これは、幕末期の天皇や朝廷の問題を考える際には、ぜひ押さえておかねばならない認識だと思います。

次にこれは限りなく雑感に近いものですが、ちょっと申し上げたいことがあります。それは幕末期の天皇や朝廷のことを考える際、都合が良過ぎる史料の取り扱いが慎重にしなければという点です。本日の私のお話の中で、孝明天皇が鷹司家による朝廷支配を打倒しようと考えていたと見なす近年の説があると申しました。そして、この根拠として引用されるのが、安政五年正月二十六日付で時の関白であった九条尚忠に宛てた宸翰です。この中で、孝明天皇は、「是迄之相談事同様ニ、予一言ニ太閤（鷹司政通）多言ニテ申切ニ成候半ト、其段深心配候」と相手（九条尚忠）に伝

えます。

この宸翰が発せられた背景をごく簡単に説明しますと、どうしても開国を承認できないという気持ちになっていた孝明天皇の前に立ち塞がったのが、当時太閤となっていた前関白の鷹司政通でした。そのため、天皇は自分の思いを貫くべく、この鷹司政通と対決せざるをえなくなります。ところが、鷹司政通は有能かつ老練な政治家ですから、開国はもう世界史の流れの中で避けられないということ十分に理解していた。と同時に、幕府との関係を損ねたら、承久の変のようなことが下手をすれば起こらないとも限らない、ということも心配した。だが、孝明天皇はどうしても自分の気持ちを抑えることが出来ない。こうした中、頼りにならないが、他にすぎる相手もいなかったため、関白職の九条尚忠に助けを求めたのが、この宸翰に他ならなかったのです。

さて、ここでほんの少々問題提起したいのは、この宸翰をもって、鷹司家の長年にわたる朝廷支配に孝明天皇がかねがね反発していて、それがこうした形での意思表示となったと見ていいのかどうかということです。確かに、先入観をもって、この宸翰を見れば、そのような受けとれなくもない。いつか機会があったら鷹司家の朝廷支配を打倒しようと考えていた天皇の本音がつい出たと見るわけです。その点ではこの宸翰はもの凄く都合のいい史料となるわけです。

だが、当然のことながら、それまでの孝明天皇と鷹司政通両者

の関係等を考慮して、この宸翰を見ないと判断を誤ることになります。私は前掲の拙著『幕末の朝廷』で、それまでの孝明天皇と鷹司政通との関係を詳しく分析して、この天皇には鷹司家の朝廷支配を打倒する気持ちなど毛頭なかったことを記しましたので、参照してください。

とにかく、研究者というのは、どうしても自分にとって都合のいい史料を使いたくなるんです。かつての私にも、そうした嫌いがなかったとは申しません。なお、この点との関連で、いま一つ付け加えると、有名な慶応二年（一八六六）の坂本龍馬宛桂小五郎書簡があります。例の薩長盟約の内容（六ヶ条にわたる）が記されていることで有名な書簡です。実は私、あれは大したことない書簡だということを近年主張しています。

これは、皆さん案外御存じないのですが、薩長盟約に関する史料は薩摩藩側にはまったく残っていないんです。長州側にも桂書簡を除けばありません。今までは、それはそれは非常に重要な密約であったから秘密にされ、その結果、史料が残らなかったのだとされてきたんです。だけど、私はそうじゃないという考えを持っているんです。あれは様々な思惑を胸に桂小五郎が意図的に残したものだとは私には考えております。さらに言えば、もし、本当に大事な秘密事項だったら、薩摩藩側にも情報の内容を記したものが残っているはずですよ。情報というのは、大事な内容であればあるほど、極秘にすればするほど洩れやすいものです。したがって、

私は、この時、西郷らが桂に対して、重大なことを自分たちが言っているという意識（自覚）がないから、薩摩側に盟約に関する史料が残っていないというふうにごく勝手に考えています。しかし、幕末政治史は、とにかく、この坂本龍馬宛の桂小五郎書簡を根拠に、薩長両藩がこのあと深く結合したことを強調して、幕末最終段階の歴史を説明したがりです。だが、私にとっては、極めて問題の多い書簡なので、慎重に取り扱わねばならないと考えています。それはさておき、こうした都合が良過ぎる史料の取り扱いには慎重にやっておるべきでしょう。

それから次。孝明天皇の父であった仁孝天皇の存在をどう見るかという問題です。この天皇は、非常に穏やかな人だったようですね。もつとも、その分、先ほど挙げた光格天皇と孝明天皇とをつないで、幕末期における君主意識の形成の問題を考えようとすると、私には、この天皇の存在が浮くんです。私はごく普通に考えて、光格天皇の君主意識が非常に強く、それが孝明天皇に受け継がれたとしたら、この仁孝天皇にもそうした面が多少ないとおかしいと思うのですが、この天皇にはそうした面が認められないですね。私の理解している範囲で言えば、仁孝天皇は非常に温厚な天皇です。また、反幕意識を感じさせる行動を採ったことはないようです。しかし、有り体に言えば、この天皇がどういったことを考えていたのかは、実はサッパリ判りません。なにしろ、史料が極度に限られるからです。ただ、こうした政治家タイプとは到底い



えない天皇の心情などを分析するには、和歌が一番有力な材料になるかと思えます。いずれにせよ、この仁孝天皇の存在をそれなりに幕末史の中できちんと押さえて見ていく必要が、私はあるんじゃないかと考えています。

つづいて、本日の話の冒頭部で予告しました問題に入りまです。国学、特に平田国学と地域指導者との関係についてです。この点に関し、これまでの幕末史においては国学の過大評価があるのではないかとというふうに私は見てるんです。というのは、先ほども申し上げましたが、私ここ十数年、勤務先の図書館が所蔵している越前福井の豪農であった杉田仙十郎という人物の史料をずっと読んできて、少々感じるものがあるからです。この人物は、もちろん地域の指導者ですが、一方では国士もしくは志士と言ってもいいタイプの人物です。

例えば、武田耕雲齋に代表される水戸天狗党の連中が敦賀で処刑されますよね。あの時に、この仙十郎なる人物は、豪農の身分ながら彼らを助けようとして、自分の住む越前地域の土木作業にこの水戸浪士たちを使用したいと藩に願い出て、そういう形で彼らを助けようとしています。そのような人物です。

そうしたことはともかく、私、この人物に関連する史料を長年になわたって見ていますが、平田国学に傾倒したとか、本居派の国学に関心を抱いたといった史料はまったく出てこないんです。まったく出てこない。もちろんそういった史料が失われたという可能

性は十分にあります。それはおき、私の乏しい勉学の中で関わった他地域の史料を見ていると、地域の豪農たちが、平田派の国学を通じて、政治運動に関わっていったというケースには案外多くありません。伊勢とか尾張とか美濃などの豪農の中には、伊勢神宮に近いといったこともあって、むろん該当する人物はそれなりの数いただろうとは思いますが、それ以外の地域でははたしてどうでしょうか。

私には、幕末期の地域指導者といえ、すぐに平田国学との繋がりを指摘して、それでもって地域指導者のあり方を探るといった傾向がなきにしもあらずと思われませんが、これからは、そうではない地域指導者のあり方も積極的に取り上げていく必要があるかと存じます。そして、天皇制の問題も、こうした非平田派の地域指導者との関連で考察することも大事じゃないかなと思います。平田派の国学などとは関係のない地域の指導者たちが、天皇や朝廷の存在を、どのように考えていたのかといったことを、これからは問題にしなければならぬと考えています。

時間が押してきましたので、つづいて幕末期の朝廷と幕府の関係を考えるうえで大きな意味をもつ王政復古の問題に移ります。なぜ幕末最終段階に至って王政復古となったのかという問題です。この問題もいま一度振り返っておく必要があるかと思えます。ところで、江戸期の史料を見ていて、つくづく痛感させられるのは、先程も朝廷関係者のところで一寸ふれたように、当時の日

本人の価値観は、基本的に言えば変革に価値を見い出さないといいものです。言い換えれば、変化を善しとしないということですが、とにかく、長年にわたって継承されてきたもの（変わらないもの）に無条件に敬意を表する面が強いなと感じます。その点では現代人のように変革に多大な意義を見出す価値観とは真逆です。それから、江戸期の社会は、老齢を理由とする退職を認めない社会なんでしょうね。だから、鷹司政通の長期政権なども、そういう目で見れば、また違った評価も可能になるのじゃないかなという気がします。

さらに、ここで再度繰り返しますが、関白など朝政を担当する上層部は自分たちの生活にある程度満足していたこともあって、国政に関わる問題を処理する能力も意欲もともになかった。したがって、政権が返上されて、自分たちが国政を担当するような状況になることをとても嫌がった。これは言ってみれば、最近のスコットランドの独立問題と同じことじゃないですかね。既得権を得ている人間というのは、現状の変更を望みません。すなわち、変革を求めません。

このことは、慶応二年七月に家茂将軍が亡くなり、徳川慶喜が徳川家を継いだあと、彼の除服参内問題が出てきた際に明らかとなります。今までは、慶喜が自らの將軍職就任を望んだために除服参内を実現しようとしたといったことばかりが強調されてきたんですが、実はこのことを最も強く望んだのは、二条関白とか中

川宮あたりです。こういう連中が、家茂の喪があげれば、すぐに慶喜に参内を命じ、そのあと彼を次期將軍に就かせたいと望んだのです。なぜかと言えば、自分たちが国政を担当するなんて迷惑そのものと受けとめたからです。そして、ここに、王政復古クーデーが行なわれて、摂家支配が廃止されざるをえなかった最大の理由があります。再度繰り返しますが、こうした連中では新しく成立する国家を任せられなかったからです。

いよいよ最後に、ほんのちよつとだけ申し上げて、私の話の終わりとなります。私、自分の書くものでは、武力倒幕派といった言葉は全く使いません。なぜかと言えば、武力倒幕派という表現は実態とははなはだ違うと思っっているからです。実態を考えれば、幕府に対して強硬な姿勢を取った（あるいは抵抗した）連中は、抗幕派もしくは対幕強硬派といった言葉で表現したほうが妥当かと思えます。それと、私には世間で通常よく使われている武力倒幕派という表現を用いると、不必要に英雄史観につながるの危険の念があります。いわゆる薩長両藩が同盟を結んで雄雄しく幕府を倒したという、実態とはかけ離れた誤ったイメージですね。そうしたこともあって、私は対幕強硬派という言い方をもっぱら使っております。

さらに、これからの研究に対する私の個人的な要望を申し上げます。今後は朝廷内の人物個々人の内実をもっと多面的に明らかにする研究を、どなたかしていただけませんか。私などは、も

う年齢的な制約もあるし、また能力の面でも問題があるので出来ませんが、どなたか（できれば若い方々に）是非やっていただければなと希望しております。

例えば、これまでまったくやられてこなかった武家伝奏クラス  
の扶幕派公卿の実態の解明などなされれば良いと思います。幕  
府寄りだと思われて、とかくいままで不人気で敬遠されてきた公  
卿などの中には、案外史料が多く残っている人物もいるかと思  
います。そういった人物の精細な研究がなされたら、朝廷と幕府の  
関係も、いままでのレベルよりまた一段と向上するのではない  
かと考えております。ここで丁度、私に与えられた時間が経過し  
ました。これで私のつたない話を終わりにします。

（付記）

ごく最近、平田派をはじめとする国学者グループには属さ  
ない地域指導者が、近代天皇制の誕生にどう向きあったか  
について記した小著を上梓しました。『ある豪農一家の近代―  
幕末・明治・大正を生きた杉田家』（講談社選書メチエ）がそ  
れです。目を通していただければ幸いです。

